

山口県の地質物語 - 2 : 萩・笠山と活火山

萩の笠山（標高 112.2 m, 図 1）の名称は、形が市女笠（平安中期以降の女性が外出時に着用）に似ていることに由来する。地質学的には、広く平らな笠の部分^{いちめがさ}が溶岩台地であり、中央の高い部分（巾子^{こじ}）がスコリア丘からなる単成火山である。県内で最も新しい時代にできた火山の 1 つであり、活火山に認定されている。

溶岩台地は 11,400 年前に噴出した玄武岩質安山岩（図 2）からなり、その上に 8,800 年前のストロンボリ式噴火で安山岩質スコリア（図 3）が積み重なり、スコリア丘をつくった（永尾, 2002）。笠山の周辺（山口市阿東町嘉年上から萩市相島におよぶ範囲内）には、笠山と同じような高さ 100 m 前後で、底径 0.5～3 km の小規模な単成火山が 50 個ほど散在している。これら全体を阿武火山群といい、それらの岩石を阿武火山岩と呼んでいる。

阿武火山群は、地球内部からわき上がってくる熱い物質が溶けてできたマグマの活動によって形成されたホットスポット型（プレート内）の火山である。その活動は、古期と新期に分けられる。古期の火山活動は約 200～160 万年前までのアルカリ玄武岩の噴火で、中小川と杉原付近に 2 つの溶岩台地をつくっている。新期の火山活動は約 80 万年前から 8,800 年前まで続き、アルカリ玄武岩とそれに伴うカルクアルカリ安山岩～デイサイトが噴出し、多くの溶岩平頂丘とスコリア丘を形成している（永尾, 2002）。

平成 15（2003）年 1 月に、火山噴火予知連絡会の審議を経て気象庁は、日本の活火山の定義を従来の「過去 2,000 年以内に噴火した火山」から「おおむね過去 1 万年以内に噴火した火山」に改訂した。この改訂によって、日本の活火山は現在 110 火山となり、中国地方では笠山を含む阿武火山群と三瓶山^{さんべさん}がランク C に認定されている。この結果、国際的な定義と同じになった。（文責：西村祐二郎）



図 1 萩・笠山の溶岩台地とスコリア丘（菊ヶ浜から望む）

（図 1～3：山口県の岩石図鑑）



図 2 溶岩台地の玄武岩質安山岩（原寸大）



図 3 スコリア丘の安山岩質スコリア（原寸大）